

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23330197

研究課題名(和文) 集団の心理的創発特性の可視化による的確なチーム・マネジメント方略に関する研究

研究課題名(英文) A study on the development of effective team management strategies by using of visualization of psychological emergent properties of groups

研究代表者

山口 裕幸 (Yamaguchi, Hiroyuki)

九州大学・人間・環境学研究科(研究院)・教授

研究者番号：50243449

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,800,000円、(間接経費) 3,240,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、集団の心理的創発特性を可視化し、それを活かして効率的なチーム育成プログラムの開発に向けた具体的な検討を積み重ねることである。具体的には、メンバー間で交わされるコミュニケーション行動を逐一記録する最先端測定システムを活用して、チーム・コミュニケーションの様相を可視化して、チームの心理学的全体特性との関連性を検討した。また、企業の高パフォーマンス・チームに備わるチームプロセス特性を明らかにした。この他、実験室実験による共有メンタルモデルの構築促進要因や、チームの記憶共有システムがチームプロセスに及ぼす影響、さらにはチーム規範や組織の安全文化の可視化について実証的検討を行った。

研究成果の概要(英文)：The main purposes of this study were to visualize psychological emergent properties of a group as the whole and to accumulate examinations and findings to exploit the effective team development programs. We conducted visualization of states of team communication by using of "Business Microscope" system that enabled to monitor communication behaviors among team members. Then we examined the relationships between the attributes of visualized team communication and the traits of psychological emergent properties of a team. We also examined the specific qualities of team processes which high performance teams carry in business organizations. Constructive discussion was carried out on the basis of findings of these studies and some other ones like as the examination of fostering shared mental model among team members, influences of transactive memory system on team processes, and visualization of team norms and organizational security culture.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・社会心理学

キーワード：emergent property visualization shared cognition team mental model team communication

1. 研究開始当初の背景

健全なチームの育成や効率的なチーム・マネジメントのあり方に関する実証科学的研究の潮流の中で、メンバーどうしの相互作用によって生み出される集団規範やチームワーク、あるいはチーム・コンピテンシーやチーム・メンタルモデル等の「集団全体の心理的創発特性」を的確に把握しながら働きかけていくことが、極めて重要な課題として認識されている。

しかしながら、集団の心理的創発特性は、力動性に富んでいるうえに、主観的・感覚的に把握することはできても、目には見えにくいことが多く、客観的に明瞭に把握することは容易ではない。

本研究では、従来の組織行動学からの研究アプローチに、社会心理学的視点からの検討を加え、さらに情報工学の最先端技術を活用したチーム・コミュニケーションの測定システム(「ビジネス顕微鏡」日立製作所)および観察工学の技法に社会心理学的な測定技法を融合させて、集団の心理的創発特性を的確に測定し、結果を可視化して提示する手法の開発によって、上述した研究課題を克服しようと考えた。また、この取り組みは、学際的なコラボレーションによって社会心理学の新たな方法論を開拓する取り組みとしても、学術的意義が高く認められ、多分野交流による新たな研究アプローチを实践する研究として期待された。

2. 研究の目的

本研究は、集団の心理的創発特性を可視化する測定技法を開発し、それを活かした的確なチーム・マネジメント方略を検討して、効率的なチーム育成プログラムの構築に向けて具体的な検討を積み重ねることを目的とするものである。

具体的には、チームメンバー間で交わされるコミュニケーション行動を逐一記録する「ビジネス顕微鏡」と称されるシステムを活用した可視化技法の開発に取り組んだ。また、チーム育成の過程で重要な課題となるチー

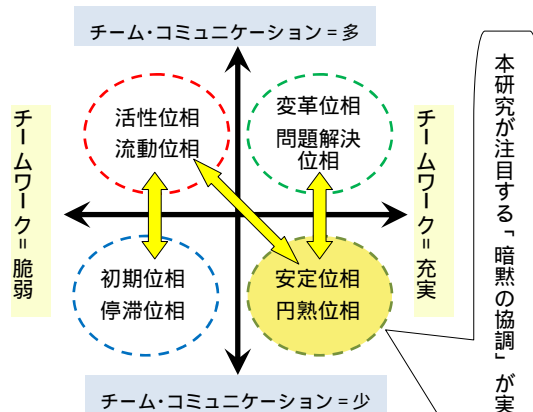


図1 仮説のモデル図

チーム・コミュニケーションの多さとチームワークの充実度は直線の関係ではなく、チームの発達過程および直面する課題の性質に応じて4つの位相間を移動する関係にあるだろう

ム・コミュニケーションの成熟プロセスモデル(図1)の妥当性について実証的検討を行う。さらに、実証的検討の結果を基盤として、健全で生産的なチーム育成のためのマネジメント方略を検討し、具体的なチーム育成プログラムの構築を目指した。

3. 研究の方法

本研究では大きく3つの方法論的アプローチをとった。

- (1) チームメンバー間で交わされるコミュニケーション行動を逐一記録する「ビジネス顕微鏡」システムを活用して、企業における職務遂行チームを対象に、チーム・コミュニケーション行動を詳細にかつ長期間にわたり測定・記録して、そのデータを多様な解析方法を用いて分析し、可視化するアプローチ
- (2) 企業や総合病院等の職務遂行の現場において、行動観察やインタビューを行い、その分析結果に基づいて、質問紙を構成し、調査研究を行い、その結果を多変量解析等によって解析するアプローチ
- (3) チームメンバー間の情報共有(transactive memory)やメンタルモデル共有が実現されるプロセスで重要な機能を果たしている変数を明確に同定するための実験室実験によるアプローチ。

4. 研究成果

実施した実証的研究のそれぞれ個別的な具体的な成果は以下のように整理できる。いずれの研究もその成果は、国内・国際学会で発表し、論文にまとめ学会誌に投稿した。

(1) 組織メンバー間のコミュニケーション行動の可視化とチームの心理学的全体特性との関連性 組織メンバー間のコミュニケーション行動について、ビジネス顕微鏡システムを使用して定量的に詳細に測定し、その様相を可視化するとともに、独自に開発したチームワーク測定尺度ならびに職務満足感や組織コミットメント、チーム・アイデンティティの測定も併せて行い、それらの変数間の関係性を分析した。その結果、メンバー間のコミュニケーション行動の交換頻度が高く(活発で)、より多様なメンバーとのコミュニケーションが行われていたフラットなコミュニケーション構造のチームの方が、メンバーによる自チームのチームワーク評価や職務満足感やコミットメントは低いことが明らかになった。

この結果は、一般的に暗黙のうちに支持されているコミュニケーションの活発なチームほどより優れたチームワークを発揮するという関係性とは反対の研究知見である。こうした結果が出た理由として、チームの発達段階に応じたメンバー間のコミュニケーション行動の変化の様相を視野に入れた検討の必要性が示唆された。すなわち、優れたチームは、チーム活動の初期段階におけるメンバー間のコミュニケーション行動は活発であるが、それによって情報の共有やメンタルモデルの共有が進み、その結果、互いの意図や思考・行動を正しく推測して自己の判断や行動を選択できるようになるため、客観的に観察されるコミュニケーション行動は少なくともよくなるのではないかと。逆に、効果的なチーム活動

が実践できないチームでは、一定期間を過ぎても、互いの意思確認、行動確認のために、メンバー間のコミュニケーションが必要であるため、観察されるコミュニケーション行動も減少しないまま推移すると考えられる。この示唆をモデル化したものが先に示した図1である。

このモデルの妥当性を検証すべく、本研究では第二段階の取り組みとして、11ヶ月間に涉って共通の職務プロジェクトに取り組む17のチームを対象に、ビジネス顕微鏡システムを使用して、メンバー間のコミュニケーション行動を測定し、各チームのパフォーマンスおよび組織上位管理者からの評価のそれぞれの優劣との関係を分析した。その結果、メンバー間のコミュニケーション行動は、チーム活動初期段階から中期段階に増加し、それ以降、次第に減少する推移を見せるチームのパフォーマンスと管理者評価が高かった。また、一定のメンバーを中心としたコミュニケーション構造を備えるようになったチームのパフォーマンスも優秀であった。

これらの結果は、本研究が導出した仮説モデルの妥当性を支持する方向にあると同時に、長期にわたって測定した時系列データの、更なる多様な分析の必要性と可能性を示すものとなった。このことをふまえ、複雑系計算学の専門家との共同研究態勢を整え、各チームのコミュニケーション行動が変遷する様相を動画として可視化することを試みている。

(2)企業組織を対象にした高パフォーマンス・チームを育成するマネジメントに関する調査研究 企業Xで161チーム(1433人)、企業Yで37チーム(190人)に質問紙に回答を求めるとともに、各チームの客観的なパフォーマンス指標(販売業績や営業成績のデータ)を入手して、チーム・プロセスの特性との関連性を分析して明らかにした。

マルチ・レベル構造方程式モデリングを用いて分析した結果、チーム・コミュニケーションの効果性に関するメンバーの評価の優劣は、目標への協働に関する認知を経て、チーム・パフォーマンスの優劣に影響を及ぼすことが明らかになった。また、一般に、チーム・パフォーマンスの優劣が、チーム・コミュニケーションやチームワーク・プロセスの優劣に影響するプロセスも考えられるため、このプロセスがどれほど強い関係性を持つのかについても検討したが、有意性は確認されなかった。これらの結果は、組織における効果的チーム・マネジメント方略を検討する際、まずはメンバー間のコミュニケーションを活性化し、有効なものに高めるための取り組みが第一段階として鍵を握ることを示唆しており、実効的マネジメント方略の開発に向けて重要な視点を提供するものといえる。

(3)共有メンタルモデルの構築を促進する要因に関する実験室実験研究 チーム活動を継続する中で、メンバー間にメンタルモデルの共有が成立することを指摘する研究は少なからず存在するが、その実証研究はまだ所についたばかりである。本研究では、2者が互いに異なる役割を遂行しながら、チームとして成果をあげるPCゲーム課題を用いて、実験室実験を行って、共有メンタルモデルの構築を促進する条件の検討を行った。独立変数とし

て、役割交替のある条件と、役割を固定する条件を設定するとともに交替のある条件においては、交替を課題遂行初期に行う条件と、中期に行う条件の2水準を設けた。従属変数には、課題遂行過程の行動観察結果、パス・ファインダー法による共有メンタルモデルの測定結果、課題パフォーマンスの結果を設定して実験を行った。

その結果、役割交替の主効果は有意ではなく、初期に交替した条件に比べて中期に交替した条件の方が、メンタルモデルの共有度は高かった。ただ、メンタルモデルの共有度がパフォーマンスの優劣に及ぼす影響は十分に見いだせず、実験参加者がもともと保有していたゲームへの慣れや能力の変数を統制したうえでの検討の必要性が示唆された。これらの結果は、単に役割交替を行っても、メンタルモデルの共有につながるとは限らず、交替の適切なタイミングが存在することを示している。これらの研究成果については、国内・国際学会で発表し、海外ジャーナルに投稿した論文が掲載された。本研究によって実験パラダイムの精緻化を進めることができたので、これに基づいて、今後も実験室実験による検討を進めて行く。

(4)メンバー間の情報共有システム構築プロセスの研究 テレビ放送番組制作チームを対象にして、分有型記憶システム(transactive memory system)の形成プロセスと、その効果性に関する調査研究を行った。まず、毎日ニュース報道を行うチームを対象にして、チームの一員として参与観察を行いながら、メンバー間の情報共有システムの構築状況を測定するとともに、その構築を促進する変数を明らかにすることに取り組んだ。さらに、情報番組制作チームを対象にして、同様に参与観察に基づく調査研究も実施した。その結果、職務遂行過程で対処あるいは解決すべき問題が発生することによって、メンバー間の情報交換が活性化されるものの、その情報は各個人の経験値(暗黙値)として保存されることが多い実情が明らかになった。また、職務遂行過程でメタ認知を活用しているメンバーは、チーム内で潜在的に成立している情報共有システムの存在を活用していると同時に、職務繁忙感と職務ストレスは比較的低いレベルにおさえられていることが明らかになった。この結果は、チームの情報共有システムの構築は、チーム・パフォーマンスへの影響だけでなく、メンバー個々の心理状態への影響も小さくないことを示す新たな知見と言える。発表を行い、論文にまとめ学会誌に投稿し、現在、審査中である。

(5)規範測定の測定研究 集団の心理学的全体的特性の代表的なものとして規範があげられる。その測定に関しては、リターン・ポテンシャル・モデルの研究が著名である一方、個人の認知を集計して合成した指標に過ぎないという批判も続いている。集団全体の心理学的特性の可視化を目指す本研究では、チーム規範の可視化に関する実証的検討を行った。大学院生を対象にした所属研究室の規範特性に関する質問紙調査研究によって、他者の判断を推定して、それに適応する行動を選択する「多元的無知(pluralistic ignorance)」現象が、集団規範の可視化において一定のバ

イアスをもたらすことが確認した、より精度の高い規範測定ツールに関する検討課題を明らかにした。この研究結果については、国内の学会退会でワークショップを開催しながら、多くの研究者の知見を結集して、前進させる取り組みを続けている。

(6)チーム・レジリエンスの測定ツール開発研究 チームワークや情報共有システム、規範とならんで集団全体の心理学的特性として、本研究は、チーム・レジリエンスに着目した。失敗や困難に直面して、一時的に心理状態が悪化したとしても、そこから原状に回復させて行く力がレジリエンスであり、これは個人レベルだけでなくチームや組織などの集団レベルでも発揮されることのある特性である。日常業務をチームで行い、また職務内容が多様性・変動性に富み、失敗や困難に直面することも少なくない大規模総合病院の看護師を対象に調査研究を実施した。

その結果、看護師が実際に困難に直面したときとっている行動が、「楽観視」、「ポジティブ場面想起」、「原因熟慮・省察」、「気晴らし」、「上司・同僚への相談」の5パターンに類型化されることを明らかにするとともに、職務上の困難に直面した場合には、一般に効果的とされる「気晴らし」や「楽観視」は、レジリエンスの強化にはあまり効果を持たず、むしろ、自己の職務の特性や今後の改善策について真剣に検討したり、自己の職務態度を見つめ直したりする「原因熟慮・省察」が促進的効果を持つことが示された。同様に「上司・同僚への相談」も促進的効果を持つ一方で、選択頻度そのものが低く、職場内の人間関係やコミュニケーションの質を高める取り組みの重要性が改めて確認された。

この研究結果は、国内・国際学会で発表し、国際誌に投稿した論文が掲載された。全体的な研究成果 主目的のひとつであった集団の全体的心理学的特性の可視化に関しては、ビジネス顕微鏡システムを活用したコミュニケーション構造の可視化、チームワーク測定尺度、共有メンタルモデル測定技法は、実証的検討を進め、今後の研究の進展を支える基盤構築に貢献する研究成果を得たといえる。この他にも、情報共有システムとしての記憶分有システムの測定と可視化、チーム・レジリエンスの測定と可視化についても挑戦し、一定の成果を得ている。ただし、学会発表や投稿論文審査においては、概念定義の曖昧さを指摘されることもあり、さらに精緻な検討を加えていく。

もうひとつの主目的であったチームの心理学的全体的特性の可視化を生かして、効果的なチーム・マネジメントの方略を開発する取り組みについては、高業績チームに備わる組織的条件を明らかにする調査研究の成果に基づき、具体的なチーム・マネジメント研修プログラムの開発を行った。この研修プログラムが組織現場でどれほど効果的な影響をもたらすかについては、今後精査するプロセスが残されている。プログラム開発で完了させてしまうのではなく、現実の企業組織場面の有効性を確認しながら、プログラムに修正を加えていくところまでを視野に入れたチーム・マネジメント方略の検討につなげた点で、本研究の取り組みは、将来の発展に

貢献しうる成果を得たといえるだろう。

5. 主な発表論文等

【雑誌論文】(計17件)

- (1) Fujino, H., Horishita, T., & Yamaguchi, H. Study of management for train drivers to enhance their proactive behaviours: Investigation of train drivers' daily work behaviours by participant observation. 『ヒューマンインターフェース学会論文誌』(印刷中) 査読有
- (2) 義田俊之・中村知靖 Thought Control Questionnaire 日本語版の開発 『応用心理学研究』 39 巻, 236-245, (2014). 査読有
- (3) Akiho, R. & Yamaguchi, H. The effect of cross-training on shared mental model. *Journal of Strategic and International Studies, Institute of Strategic and International Studies*, 9(2), pp13-17, (2014). 査読有
- (4) Nawata, K. & Yamaguchi, H. Intergroup retaliation and intra-group praise gain: the effect of expected cooperation from the in-group on intergroup vicarious retribution *Asian Journal of Social Psychology*, 16, 279-285. (2013). 査読有
- (5) Kikuchi, A., & Yamaguchi, H. Organizational resilience: An investigation of key factors that promote the rapid recovery of organizations. *Academic Journal of Interdisciplinary Studies*, Vol.2, No.9, 188-194. (2013). 査読有
- (6) 田原直美・三沢良・山口裕幸 チーム・コミュニケーションとチームワークとの関連に関する検討 『実験社会心理学研究』 53 巻 1 号, 38-51, (2013). 査読有
- (7) Tsumagari, Y., & Yamaguchi, H. Improving future work motivation by reflecting on past experiences. *Kyushu University Psychological Research*, Vol.14, 9-17, (2013). 査読有
- (8) 山口裕幸 安全確保のための組織マネジメント - チームワーク強化の視点を中心に 『生産と電気』 第 64 巻 1 号, 2-6, (2012). 査読有
- (9) 菊地梓・山口裕幸 組織におけるレジリエンスの統合的理解 - 時系列と対象レベルの 2 軸によるレジリエンス研究の整理 『ヒューマンインターフェース学会誌』 第 14 巻 1 号, 5-10, (2012). 査読有
- (10) 縄田健悟・山口裕幸 集団間攻撃における集合的被害感の役割 - 日中関係による検討 - 『心理学研究』, 83, 489-495, (2012). 査読有
- (11) Shirai, T., Nakamura, T., & Katsuma, K. Time orientation and identity formation: Long-term longitudinal dynamics in emerging adulthood *Japanese Psychological Research*, 54, 274-284, (2012), 査読有り
- (12) 高橋登・大伴潔・中村知靖 インターネットで利用可能な適応型言語能力検査 (ATLAN): 文法・談話検査の開発とその評価 『発達心理学研究』 23, 343-351, (2012), 査読有
- (13) Yoshida, T. Molton, I. R., Jensen, M. P., Nakamura, T., Arimura, T., Kubo, C. & Hosoi, M. Cognitions, metacognitions, and chronic Pain *Rehabilitation Psychology* 57, 207-213, (2012), 査読有り

- (14) Iwaki, R., Arimura, T., Jensen, M. P., Nakamura, T., Yamashiro, K., Makino, S., Obata, T., Sudo, N., Kubo, C., & Hosoi, M. Global catastrophizing vs catastrophizing subdomains: Assessment and associations with patient functioning *Pain Medicine*, 13, 677-687, (2012), 査読なし
- (15) 縄田健悟・山口裕幸 集団間代理報復における内集団観衆効果 『社会心理学研究』, 26, 167-177. (2011). 査読有
- (16) Goto, N., & Karasawa, M. Identification with a wrongful subgroup and the feeling of collective guilt. *Asian Journal of Social Psychology*, 14, 225-235, (2011), 査読有り
- (17) 菅さやか・唐沢 穰 コミュニケーション場面における社会的文脈の知覚が情報伝達に与える影響 『人間環境学研究』9 巻 1号, 21-26, (2011), 査読有
- 【学会発表】(計 31 件)**
- (1) Miyajima, T., Nawata, K., Huang, L., & Yamaguchi, H. Chinese attitudes toward Japan and Pluralistic ignorance: The effect of praise seeking and rejection avoidance needs on the norm-congruent behavior. *Proceedings of 2014 International Conference on Business and Social Sciences at Tokyo*, (2014.3.30, 東京). 査読有り
- (2) Akiho, R., & Yamaguchi, H. The Relationship between Shared Mental Model and Team Communication. *Proceedings of 2014 International Conference on Business and Social Sciences at Tokyo*. (2014.3.30, 東京). 査読有
- (3) Yamaguchi, H., Misawa, R., & Tabaru, N. A social psychological study on the reason for mass job separation among nurses in Japan. *Proceedings of 2014 ISIS-Key West International Multidisciplinary Academic Conference*. (2014.3.18, Key West, 米国). 査読有り
- (4) 田原 直美† 山口 裕幸 職場におけるチーム・コミュニケーションの発達過程に関する検討 電子情報通信学会ヒューマンコミュニケーション基礎研究会・鹿児島大会 『信学技法』 (2014.2.2, 鹿児島大学). 査読なし
- (5) 山口裕幸 医療の質と安全を守り高めるチームづくりをめぐる 医療の質・安全学会第 8 回学術集会・招待講演 (2013.11.23, 東京ビッグサイト TFT ホール)
- (6) 中間尚子・箱田裕司・中村知靖 情動知能と IQ 九州心理学会第 74 回大会 (2013.11.16, 琉球大学)
- (7) 山口裕幸・村本由紀子・木下富雄 規範の測定と可視化への再挑戦 (2) 日本社会心理学会第 54 回大会(2013.11.4, 沖縄国際大学)
- (8) Kikuchi, A., & Yamaguchi, H. Organizational resilience: An investigation of key factors that promote the rapid recovery of organizations. *The 3rd International Conference on Human and Social Science in Rome*. (2013.9.20, Rome, Italy). 査読有り
- (9) 縄田健悟・山口裕幸・波多野徹・青島未佳 企業組織のけるチーム・プロセスの構成要素の検討 産業・組織心理学会第 29 回大会(2013.9.7, 京都橘学園大学).
- (10) 山口裕幸 グループ・ダイナミックス - その成果とこれからの課題 日本グループ・ダイナミックス学会第 57 回大会シンポジウム・招待講演(2013.7.14, 北星学園大学).
- (11) 山口裕幸・縄田健悟 高業績チームに備わるチーム・プロセス特性の実証的検討 日本グループ・ダイナミックス学会第 60 回大会(2013.7.14, 北星学園大学).
- (12) Fujino, H., Horishita, T., Sonoda, T., & Yamaguchi, H. Study of train drivers' work motivation and its relationship to organizational factors in a Japanese railway company. *The 4th International Railway Human Factor Conference* (2013.3.5, London, UK).
- (13) 山口裕幸 規範の測定と可視化への再挑戦-ビジネス顕微鏡による行動観察を併用した取り組み 日本社会心理学会第 53 回大会 (2012.11.17, つくば国際センター)
- (14) 縄田健悟・山口裕幸 集団間攻撃における集会的被害感の役割-日中関係における検討-日本グループ・ダイナミックス学会第 59 回大会 (2012.9.22, 京都大学)
- (15) 松尾和代・山口裕幸 記憶分有システムの形成を促進するチームコミュニケーションの影響 - 2 時点変化の影響を中心に - 日本グループ・ダイナミックス学会第 59 回大会 (2012.9.21, 京都大学)
- (16) 山口裕幸 複雑化する社会において産業・組織心理学は何ができるか、何をなすべきか 産業・組織心理学会第 28 回大会・招待講演 (2012.9.1, 文教大学)
- (17) 竹下浩・山口裕幸 チーム学習の集団間比較モデル 産業・組織心理学会第 28 回大会 (2012.9.1, 文教大学)
- (18) Fujino, H., Horishita, T., Sonoda, T., & Yamaguchi, H. Investigation of relationship between train driver's work motivation and organizational factors. *The First International Symposium on Socially and Technically Symbiotic System*, (2012.8.31, 岡山)
- (19) Matsuo, K. & Yamaguchi, H. A higher state of self-awareness improves team performances. *The 16th annual meeting of the Association for the Scientific Study of Consciousness* (2012.7.2-7.6, Brighton, United Kingdom).
- (20) Kikuchi A. & Yamaguchi, H. The study of job-resilience and team-resilience in the nurse teams. *The 10th Conference of European Academy of Occupational Health Psychology*, (2012.4.5-4.7, Zurich, Switzerland).
- (21) 黄麗華・縄田健悟・樊琴・山口裕幸 日中関係における集会的屈辱感が両国間の態度に及ぼす影響 - 両国の大学生における検討 日本社会心理学会第 53 回大会 (2012. 11.18, つくば国際センター)
- (22) 唐沢 穰 「企業の社会的責任」はいかにして認知・評価されるのか 産業・組織

- 心理学会第 108 回部門別研究会（組織行動部門）・招待講演（2013.3.30, 東京富士大学）
- (23) 後藤伸彦・唐沢 穰 外集団の集会的罪悪感と将来の攻撃抑止の表明が被害集団からの罪悪感付与に与える影響 日本心理学会第 76 回大会（2012.9.11-9.13, 専修大学）
- (24) Yamaguchi, H. and Kikuchi, A. A social psychological study on organizational factors to nurture good teamwork and team resilience of nursing teams in hospitals. *International Journal of Arts and Sciences' (IJAS) International Conference for Academic Disciplines*, (2011.11.3-5, Rome, Italy).
- (25) Shirai, T., Nakamura, T., & Katsuma, K. Time belief and identity formation in emerging adulthood: 12 years longitudinal study. *Society for Research on Identity Formation 19th Annual Conference* (2012.3.7, Vancouver, Canada)
- (26) Lee, T., Fiske, S. T., & Karasawa, M. Immigrant stereotypes: Impact of societal diversity on target images and lay theories about outgroup perception. *Symposium presentation at the 13th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology*, (2012.1.27, San Diego, U.S.A.)
- (27) 中村知靖 発達心理学の新しいかたちと青年心理学 日本青年心理学会第 19 回大会（2011.11.26, 文京学院大学）
- (28) 松尾和代・山口裕幸 組織における Transactive Memory System の形成促進要因の検討 - タイムプレッシャーの影響を中心に - 産業・組織心理学会第 27 回大会（2011.9.4, 中村学園大学）
- (29) 菊地梓・山口裕幸 職場におけるチームレベルおよび個人レベルのレジリエンス研究 産業・組織心理学会第 27 回大会（2011.9.4, 中村学園大学）
- (30) Karasawa, M. Social groups as a basis for explanations: How ordinary perceivers make sense of other people's behavior. *A Keynote Address at the 9th Biennial Conference of Asian Association of Social Psychology*, (2011.7.29, 昆明, 中国)
- (31) Nawata, K. and Yamaguchi, H. The effect of expected ingroup cooperation on intergroup vicarious retribution. *The 16th General Meeting of the European Association for Social Psychology*, (2011.7.10, Stockholm, Sweden).

〔図書〕(計 8 件)

- (1) 山口裕幸 グループ・メンバーシップ 『新・社会心理学 - 心と社会をつなぐ知の統合』(唐沢かおり・編著) 北大路書房 総 218 ページ(分担ページ 113-129) 2013 年
- (2) 中村知靖 多変量解析を利用した心理測定法 『新・知性と感性の心理』(行場次朗・箱田裕司・編著) 福村出版 総 317 ページ(分担ページ 251-264) 2013 年
- (3) 山口裕幸 組織コミュニケーションの将来と待ち受ける課題 『<先取り志向>

の組織心理学 - プロアクティブ行動と組織』(古川久敬・山口裕幸・共編著) 有斐閣 総 292 ページ(分担ページ 155-192) 2012 年

- (4) 山口裕幸 集団錯誤の呪縛からの解放への道標 『心と社会を科学する』(唐沢かおり・戸田山和久・共編著) 東京大学出版会 総ページ 221(分担ページ 71-94) 2012 年
- (5) 中村知靖 表情を利用したコミュニケーション能力の測定 『コミュニケーションと共同体』光藤宏行(編)九州大学出版会 総ページ 214(分担ページ 105-116) 2012 年
- (6) 山口裕幸 組織の規範とマネジメント 『展望 現代の社会心理学第 3 巻: 社会と個人のダイナミクス』(唐沢穰・村本由紀子・共編著) 誠信書房 総ページ 332(分担ページ 19-38) 2011 年
- (7) 唐沢 穰・結城雅樹 集団間の関係 『展望 現代の社会心理学第 3 巻: 社会と個人のダイナミクス』(唐沢穰・村本由紀子・共編著) 誠信書房 総ページ 332(分担ページ 39-57) 2011 年
- (8) Karasawa, M. Categorization-based versus person-based explanations of behaviors: Implications from the Dual-Process Model. In R. M. Kramer, G. J. Leonardelli, & R. W. Livingston (Eds.), *Social cognition, social identity, and intergroup relations: A Festschrift in honor of Marilyn Brewer*, Psychology Press: New York, Pp.9-26, 2011

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)
取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.hes.kyushu-u.ac.jp/~yamaguchi-lab/>

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
山口 裕幸 九州大学・人間環境学研究院・教授
研究者番号: 50243449
- (2) 研究分担者
唐沢 穰 名古屋大学・環境学研究院・教授
研究者番号: 90261031
- (3) 研究分担者
中村 知靖 九州大学・人間環境学研究院・教授
研究者番号: 30251614